

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	厭世觀 : 論説
Author(s)	柳井, 秀岳
Citation	龍南會雜誌, 78 : 48 - 54
Issue date	1900-05-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5534
Right	

乞ふ一語を諸君の坐右に呈せん、曰く、天下は書物のみにて經營すべからず、社會は慾得のみにて生存せず、人生の能事は黄金に叩頭するのみにあらずと、

余輩は、この篇によりて、社會の大勢を呪服せんとにはあらず、又これによりて大勢を如何にすべきやと論せまにあらず、只如何になり行くべきやと論じたるに過ぎざるのみ、(完)

厭世觀

柳 井 秀 岳

人間の天職は、人間の爲めに勞作するに在り。然るに一身の安逸を求めて、人間社會の職務を無視せんと欲するが如きは、社會の叛賊と謂うて可なり。人間の勞作は、天帝が下せる法律なり。然るに嘖々たる事より、人間社會を徹履の如く捨てんと欲するは、寧ろ天帝の罪人と謂うて可なり。故に吾人は深く厭世を惡むもの也。然り、厭世は慥に吾人の元氣を消耗せ、吾人をして天職を擲たしむるの指導者なり。少なくとも吾人を墮落せしむるの助手たるには相異なき也。然れども、人情血あり、涙あり。暗夜人定まり、四面寂寞たるの時、靜に思を馳せんか、誰か幾分の厭世觀念を起さざらんや。吾人が今述ぶる所は、此の偶然的發作を捕へ來りたるに過ぎず、故に吾人は、此言あるが爲めに、直ちに人間の天職を擲たんと欲するものに非ず。況んや吾人は、厭世を以て、社會の叛賊、天帝の罪人を生ずるの階段たるを知るをや。嗚呼、吾人既に厭世の非なるを知る。知りて而して言ふを禁する能はず。蓋し意思の薄弱之をして然らざるが爲めか。將た多情多感、抑へんと欲

して、抑ふる能はざるものあるが爲めか。世若老厭世觀は、功利的、現在的、ならざるの致す所なりと謂ふものあらば、吾人は寧ろ厭世を喜ばんと欲するもの也。咄。

机上に開きたる書物は、讀み倦みたりとて、文箱の隅に押込み、今日の役目は、爲え終れりといはぬばかりの休息烟草、取り出で、やがて薰ずる烟は、顔をかすめ、平和に太平に、登り行くさまの面白きに、眸を預け、罪もなき顔を八の字形の兩掌に扼せしめ、管然とて、物をも思はず、已をも打忘れたる有様は、如何に惘然たるよ。如何に槁木の如きよ。富貴も功名も、彼が腦裡を脱却せしなり。邪氣も惡意も、住む可き餘地なきに苦んで、逃れ去りしなり。曇らぬ鏡に映す可き凡ての汚點は、餘儀なくも、暇を告げて、殘れるは、僅に神より賜ひし天眞の誠、爛熳の花のみ。いかに天理に近きよ。いかに神意に合へるよ。右の南郭子綦が凡に隠りて、吾れ我を喪へりし様も、蓋之を去ること遠からざる可し。嗚呼、此の有様をして、長く變らざらざれば、世間また何の不義あらん。何の邪念あらん。何の偽善あらん。不義と邪念と偽善となくんば、富貴功名を争ふの苦み、何に由りてか起らん。何に由りてか生せん、然るに浮世の波瀾は無慈悲にも吾人を此の樂境より奪ひ去るを躊躇せず。さても果敢なきものは浮世の状態なるかな。

厲風濟りて衆竅虚となり、飄風收りて木葉動がす、嗚呼衆竅を拂ひし厲風は果えて何處より起りて何處に消ゆるものなるか。大木を拔き去る飄風は果して何處より來りて何處に逃るものなるか。其一度至るや、萬物震動去、干偶互に和し、衆竅從て鳴り、地籟の妙音を傳ふ。而も消ゆるに至りて

は、近林に鳴り、遠山に響き、峰を摩し、谷を搏ち、走ること益々遠くして、其力益々微に、遂に見る能はざるの風力と、聞く能はざるの微聲とを以て、靜かに長き眠をなすにわらずや。人間果きて何處より來りて何處に往くものなるか。其一度猗頓の富を得、位人臣を極むるや、萬民從服し、那僻の人士に唱へ、諂諛の屬下に和し、以て盛徳を鳴らし、祥福を祈る。而も死するに至りてや、眼漸く微かにきて、耳次第に遠く、生の神明漸次四體を逃れ、死の暗黒益々迫り、遂に親戚が落せる數行の涙を、此世に於ける最後の獲物として、溘然とて逝くに非ずや。何ぞ其の厲風に似て、飄風に類するの甚しき。誠に思へ、人間の功名富貴は飄風なるを、飄風于然萬物を振蕩するも、終る所は木の葉一片を動かすに足らず。此時に至りて、微風の終る所と異らんや。今夫れ如何に功名を博え、巨萬の富を有するも、人間社會を辭去する時は、冷かなる、土饅頭の下に安息するを待つに過ぎざるのみ。此の時に至りて、橋下に雨を凌ぎ、岩罅に夢を結ぶ乞丐の終る所と擇まんや。さて果敢なきものは浮世の富貴功名なるかな。

一片の功名心かられて、日に千辛萬苦の中に入出入、危きを踏で、身の安きを幸し、安きに居りて心を危きに馳せ、朝に事業と争ひ、夕に心と闘ひ、華胥の夢爲めに結はず、安息の樂、爲めに害せられ、日に其身體を勞らし、精神を憊らし、死と隣して曉らず、猶は奔波競争し、起て趨り、趨りて躓き、五尺の軀、將に棺槨内のものたらんとするに至りて、而も尙釋然とて世の果敢なきを解する能はざるもの、亦た憐ひに足らざらんや。君が曹、かの青海の頭、古來白骨人の收むるなく、無定河邊の骨尙は是れ春閨夢裡の人たるを知らずや。さて淺間敷ものは浮世の人間なるかな。嗟乎、我を喪うて嗒然たるの状態は、浮世の波瀾に破られて、久しきを持する能はず。富貴功名は、

風の如く消えて、恃むに足らず。七頭八倒の苦みも、何の功なく、其身埋没して百草に従ふ。而も彼等は之を慮らず、強て身を世上の桎梏に委せんとす。罪の絆を受けんとす。いかに無謀なることよ。いかに執念深きことよ。あゝ、彼等は人世を以て永久の存在を得るものとなす歟。呱呱の聲より、死の暗黒に沈むまで、長きも百年に過ぎず。短きは五十年を出でず。人世の艱難嘗め盡して、終る所は死のみ、墓のみ。昨夜世上の夢、未だ覺ゆず、今日既に三途の河を渡る。見ずや、朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らざるを。又見ずや、春花落ち盡えて、黃落之に次ぎ、紅顔久しからずして、老皺至るを。人世の久きからざることを此れが如く、人世の果敢なきこと彼れが如し。世に萬年の天子なく、天下亡びざるの國なし。始皇の雄圖一杯の土に葬られ、楚人の一炬、燐ひ可し焦土たり。越王宮裡の歡樂盡きて、人を傷ましむるもの鸚鵡、夕陽に飛ぶ。五陵樹なくして秋風起り、六朝夢の如く鳥空しく啼く。鐵蹄至る所、歐洲の山野を風靡せよ奈翁、今安にかある。意氣長江を呑み、槩を横へて、詩を賦せし曹孟徳、今安にかある。あはれ、歲月東流の水に歸して、死者長へに還らず。墓門苔滑かにまて、滿地の落葉人拂ふなし。鳥邊山上、烟帯に絶えずまて、北邙の頭、只松籟の哀を傳ふるあるのみ。されば、鴨長明は、人世を以て、よどみに浮ぶうたかたの如しといひしに非ずや。あはれ、果敢なきものは、人世なるかな。

然り、人世は夢の如き。吾人は五十年間に、一步づ、棺桶に向て、進み行くに過ぎず。故に縦令浮世の塵を衣服とま、食物とし、住處とするを好むものと雖も、決して人世を以て、永久の存在を得るものとせざる也。然り、慥に人世は、永久の存在を得るものに非ず。人世既に永久の存在を得るものに非ずんば、彼等は何を苦んで、浮世に煩悶せんとする歟。浮世の塵は、葡萄酒を飲むが如く、

喜で吸入すべきものとす乎。浮世の事業は、上帝の聖壇に接するの階段となす乎。盲者は物を見ず。聾者は聲を聞かず。彼等は浮世の塵に幾萬の毒虫を含むを知らざる也。浮世の事業は罪人呻吟の聲たるを知らざる也。見よ、浮世には、私黨の爲めにせんと欲して、國利民福を顧みざるものあり。經世の智識なくして、獵官に奔走するものあり。仁義の爲めには、退きて手を拱し、金錢の爲めには、進で取るものあり。苞苴を進むるものは用ゐ、直言を憚らざるものは、黜けんと欲するものあり。暴威を恣にえて、無辜の民を鞭撻するものあり。財政の困難を名とえて、徒らに收斂を事とするものあり。一夕の宴會に數百金を擲つても、公共事業の爲めには、三文を寄附せざるものあり。あゝ、浮世の事業は、誠に罪人呻吟の聲に非ずや。又見よ、浮世は、驕奢を極むるものを目して、生活の程度高しと羨み、質朴を守るものを見て、固陋なるものと罵り、人品の高下を判断するに衣服を以てし、書物の價値を定むるに、學位學士の有無を以てす。功利主義を貫んで、淡然主義を賤み、小才子を非常なる人物の如く思ひ、卓識の士を狂人の如く思惟す。顧みれば、處とえて罪惡の行はれざる地なく、場所とえて涙の落ちざる隈なま。骨肉と利を争ふを以て耻とせず、人を泣かしめて、己れ喜ぶを正當となす。かゝる不正當、不義、不徳より生ずるパチルスは空氣中に充滿ま、至る所に人を病ままむ。あゝ、浮世の塵には、洵に幾多の毒虫を含むに非ずや。彼等は此毒虫を含める塵を吸入して、快樂なりとするか。病まずんば幸なり。彼等は罪人呻吟の聲たる事業によりて、上帝の聖壇に登らんとするか。獄中に陥らずんば幸なり。嗚呼、彼等は實に盲者と謂ふ可し。聾者と謂ふ可ま。否、彼等も目あり、耳あり。未だ以て形体的に盲者と謂ふ可らず。聾者と謂ふ可らず。然れども、彼等は慥に精神的に盲者なり。聾者なり。さても憐むべきものは、浮世の盲者聾

者なるかな。

於戲、浮世は實に罪惡の地なり。修羅の巷なり。而も之を捨つる能はず、赤子の慈母に於けるが如く戀々たるは何ぞや。兄等未だ浮世の苦みを解せざる歟。浮世を以て目的となすものは、浮世の爲めに苦めらるゝを知らざる歟。昔は始皇蓬萊を尋ねて、不死の藥を求めしむ。彼れ死を恐るゝが故なり。今は權介、八兵衛綱を梁に懸けて、縊死を果たす。彼れ生の苦みに勝えざるが故なり。生果して惡む可きか。死果して恐る可きか。彼れ人生の窮まる所に安ずる能はざるを以て、得べからざるの藥を求めて、長へに歡樂を極めんとす。彼れ悠然として死の道に就くの法を知らざるを以て、綱にかゝりて非常の最後を遂げ、生の苦みを免れんとす。死を求むるものは、生の樂みを知らざればなり。生を求むるものは、死の安さを知らざればなり。彼等は徹頭徹尾浮世を以て目的となすもの也。故に浮世の爲めに苦められて、生を求めんとする也。死を求めんとする也。若し苟くも浮世以外に超然たらんか。出世間的の人物たらんか。生もまた樂む可く、死もまた樂む可き。君彼の狐狸を見ずや、食を求めて東西に奔走し、係蹄に觸れて不時の命を隕すことを。君彼の猫狗を見ずや、伏して鳥雀の遯ぶものを窺ひ、獲ずまで茫然たることを。望む所あらずんば、安ぞ失望する所あらんや。企つる所あらずんば、安ぞ失敗する所あらんや。さても憐む可きは、浮世を以て目的となすものなるかな。

君見ずや。山紫水明の邊、人烟の稀なる處、罪惡の及ばざる地、以て吾人が生を樂み、死を樂むの佳境なることを。試に溪澗の細流、水自ら潺湲たるの邊に臨み、柱を岩石に托し、軒を山木に結び、冥形ばかりの草舎を營み、陶然とまて其内に起臥せんか、日扶桑を出づれば、雲は蒼梧に飛び、雲

山嶺を蔽へば、霧は屋内に下る。夕には明月玉を沈め、朝には清風衣を吹く。雨降れば簷溜窓前に滴り、暴風至れば、大木背後に鳴る。鳥啼き獸走りて、境更に幽に、水流れ花落ちて、心愈々静に。山に採りて、美なるは茹ふ可く、流に釣りて、鮮なるは味ふ可き。寐ねては、蝴蝶の夢を結び、醒めては壺觴を引きて酔ひ、日に目を怡ばし。心を慰め、以て盡くるに歸せば、如何に愉快なることよ。如何に静閑なることよ。身罪惡の中に在らざれば、心桎梏を恐るゝを要せず。富貴に非ざれば、之を失ふを憂へず。浮世を以て目的とせざれば、生死を意とするに足らず。望む所なく、企つる所なければ、失望失敗の悲を召すことなき。心虚しく神誠にして、邪念を抱くことなく、偽善を挟むことなく、不義をなすことを知らず。寤然として死灰の如く、澹然として槁木の如きも、(浮世の波瀾至らざれば)之を攪醒するものなき也。日に天使を待ち、羽化して登仙せんとす。嗚呼此の境なるかな。此の心なるかな。

記し終りて、將に筆を置かんとす。忽ち聞く寒鴉の阿呆と啼きて過ぐるを。嗟呼、彼れ無智の動物にして、猶ほ吾を阿呆と呼ぶ乎。吾れ好で汝の呼ぶに委せん。而も吾が阿呆となる所以を知る乎。

韓非子騰議